

ヨハネの手紙第一3章19-21節 「たとえ心が責められても」

1A 愛する命令 19

1B 真理への所属

2B 神の御前での安らぎ

2A 心より大きい方 20

1B 心の責め

2B すべてをご存じの方

3A 御前での確信 21

本文

ヨハネの手紙第一 3 章を開いてください、私たちの学びは、今晚、19 節から 21 節になります。「¹⁹ そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられます。²⁰ たとえ自分の心が責めたとしても、心安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。²¹ 愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」

1A 愛する命令 19

使徒ヨハネは、兄弟を愛するという神の命令について手紙の中全体で話していますが、特に 3 章 11 節から強調して話し始めています。初めに、兄弟を憎むということが、その人が未だいのちを持っていない、死の中にいる。死からいのちに移ったのは、兄弟を愛しているところに明らかにされていると話していました。そして、いのちを兄弟のために捨てることが愛であり、それをキリストが行われた、ということ話をしています。そのような熱い愛で、困っている兄弟を助け、憐れみを示さないで、どうして神の愛が留まっていようか、と言っています。そして、18 節です。「子どもたち。私たちは、ことばや口先だけでなく、行いと真実をもって愛しましょう。」具体的に、実際に、困っている兄弟を助ける、というところに愛があり、ことばや口先だけのことではないということです。

そして、このような命令を聞きながら、私たちは、これまでの学びの中で葛藤を抱いていたのではないのでしょうか？「命令を守れてない」という葛藤です。心が責められるのです。自分は兄弟を愛せていない、憎むまでいかなくとも、嫌いになったりする。どうすればよいのだろう？というような葛藤です。今、読んだ箇所は、まさにその葛藤に対する解答であり、励ましです。

1B 真理への所属

^{19a} そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、

「**そうすること**」とは、「**行いと真実をもって**」兄弟を愛することです。そのことによって、「**自分が真理に属していることを知り**」とあります。真理とは何でしょうか？ヨハネは2章8節で話しています。「2:8a 私は、それを新しい命令として、もう一度あなたがたに書いているのです。それはイエスにおいて真理であり、あなたがたにおいても真理です。」その命令とは、兄弟を愛することですが、それはイエスにおいて真理であって、あなたがたにおいても真理だということです。イエスが、兄弟である弟子たちをご自分のいのちを捨てるほど愛しておられた。あなたがたも、同じように互いに愛し合いなさいということです。

日本語には、真理についてとても良い言葉の違いがあります。18節に出て来た、「**真実**」ですね。19節の「**真理**」と同じギリシア語が使われています。ですから、全く同じ言葉なのですが、それでも真実というのは、実際をともなった真理と言ったらよいでしょうか。真理というと、理性や理論のような響きがありますね。けれども、イエスがキリストであり神の御子であるというのは真理ですが、それは兄弟への真実な行いと不可分、切り離すことのできないものだということです。

私たち夫婦は、年末年始、大変なところを過ごしました。妻が病の中にあつたからです。それを知ったある方が、ご自分も病身なのに、なんと、大量のお惣菜を送ってくださったのです。病身で動けなくなった時に、何が困るかを知っておられたのでしょう。このように、兄弟を行いと真実をもって愛するというのは、具体的で、実践的です。

そして、ここの「知る」というギリシア語は、ギノウスコウ、つまり体験的に知るということです。私たちが、兄弟を愛していることによって、神のものとされている、神に生まれている、神に愛されている。これらのことが分かる、体験的に分かるということです。イエス様が弟子たちに語られました、「ヨハ 14:23 だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」父と子が自分とともに住まわれることを知ることができます。自分が兄弟を愛するというよりも、兄弟を愛する行いにおいて、御父と御子にある愛が流れいく、溢れていくということでしょう。

2B 神の御前での安らぎ

^{19b} **神の御前に心安らかでいられます。**

「**神の御前に**」というのは、正しく裁かれる方、聖なる方の前ということです。光であられる方の前に、ということです。自分が完璧になっているということではありません。むしろ、キリストの血が自分の罪を全て洗い流して下さっているという確信を、神の前で抱くことができるということです。「1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」

イエス様は、兄弟に「ばか」という者は、最高法院でさばかれると言われました。「愚か者」と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれると言われました。けれども、「マタ 5:23 ですから、祭壇の上にささげ物を献げようとしているときに、兄弟が自分を恨んでいることを思い出したなら、24 ささげ物はそこに、祭壇の前に置き、行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから戻って、そのささげ物を献げなさい。」兄弟と和解している時には、そのような恐ろしい裁きを受けずに済む、という確信が与えられ、心安らかでいられるということです。

2A 心より大きい方 20

1B 心の責め

^{20a} **たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。**

ヨハネは、ここで、私たちの心の責めと、神によって守られているという安心とを区別しています。私は、兄弟を愛していない、口先だけになっていて、行いと真実がないと自分の心が責められるとします。しかし、その心の責めがあっても、安らかでいられるというのは、自分の心以上に、神が守っておられるということなのです。

パウロは、ローマ 7 章で、自分が願っていることを行わず、自分の憎んでいることを行っているという葛藤を言い表しています。「7:15-16 私には、自分のしていることが分かりません。自分がしたいと願うことはせずに、むしろ自分が憎んでいることを行っているからです。16 自分のしたくないことを行っているなら、私は律法に同意し、それを良いものと認めていることになります。」心では律法に同意しているということ自体が、自分が救われている、自分の霊は贖われていることを明らかにしています。このからだには罪の原理が働いていて、このからだから誰が救ってくれるのだろうか？と嘆いています。しかし、その直後にパウロは、神に感謝していて、25 節に、「私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。」と言っています。どうしてか？というと、イエス・キリストご自身が、同じように肉体を取られて、その罪の処罰を身代わりに受けてくださったからです(8:3)。それで、パウロはこう言うのです。「8:1 こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」この「罪に定められる」と「心が責める」は、同じギリシア語が使われています。命令を十分に守り行えなかったと言えども、神は罪に定めるということは、決して行わないということです。逆を言えば、心が責められる時に、それは神が自分の心を新たにしている、贖っている、ということです。兄弟を憎むことをよしとし、それを正しいとまで思っている人こそが、新たに生まれてない、まだ暗闇に属していると言えます。

私たちキリスト者は、心の状態で神の救いを定めてしまう傾向があります。自分の心が責める時に、それで神に嫌われている、神から見捨てられている、酷い時は救いを失ったと思ってしまいます。そういう時は、喜びがなくなり、教会にも行きたくないと思うでしょう。けれども、心の状態で神の救いが決まるわけではありません。心の状態で、神の愛が変わるわけではありません。もちろん、

神の心は痛みます。けれども、それは痛むのであって、拒んでいるのでも、裁いているのでもありません。神は愛しているから心を痛めますが、それで拒むことはありません。神は、自分の心の状態に関わらず、キリストにあって行われた贖いの御業によって、私たちを救ってくださったのです。

2B すべてをご存じの方

^{20b} 神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。

これが、安らかでいることのできる理由です。心は責められても、それでも神はその心よりも大きくしておられ、すべてを知っておられて、それでなおのこと、あなたを愛し、選び、ご自分の者としてくださったのです。

イエス様が、ペテロに語りかけたことが、実に分かりやすい例です。「ルカ 22:31-32 シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。32しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」シモンが、サタンに誘惑によって、イエス様を知らないというようになります。人の前でキリストを否んだら、キリストも父の前でその人を否むことを、イエス様は言われましたね。ですから、ペテロは、神の裁きに遭うことは必至ということになってしまいます。しかし、そうならなかった。それは、イエス様が前もって執り成しておられたからです。主は、予めすべてを知っておられました。サタンがペテロをふるいにかけることを見ておられました。そして予め、彼の信仰がなくならないように祈られたのです。そして、ペテロが立ち直るところまでを見ておられます。その上で、他の兄弟たちを力づけてやりなさいと言われていました。ペテロの心は、もちろん責められたことでしょう。しかし、ペテロはイエス様の執り成しによって、終始守られていたのです。だから、心が責められていたとしても、安らかでいられます。

この点は、非常に大切です。サタンは、罪定めをする存在です。サタンは、「黙示 12:10 昼も夜も私たちの神の御前で訴える者」と呼ばれています。まず、私たちに、罪も犯して良いのだと誘います。そして罪を犯した後、今度は罪定めによってさらに神から引き離そうとします。神の前にはもう出ることはできないと思います。それで、自ら心を閉ざして、自分自分の中に引きこもるのです。神に対しても心を閉ざし、兄弟たちにも心を閉ざします。聖霊は、その反対のことをされます。罪定めではなく、罪について誤りを認めさせる働きをなさいます。罪について誤りを認めさせると、励ましと慰めの御霊ですから、キリストの流された血潮を思い起こさせます。罪を犯したことを言い表して、憐れみの神がすべての不義から清めてくださる道を示してくださいます。つまり、サタンは、罪定めによってキリストから私たちを引き離そうとしますが、聖霊は、罪の自覚によって、キリストに連れて行こうとするのです。

ですから、神が自分の心よりも大きい方で、すべてをご存じという真理がいかに大事であるかを

思わされます。自分の心だけを見つめてはいけません。神の心を見つめてください！

3A 御前での確信 21

21 愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。

心に責めがあれば、私たちは主に立ち返ります。そして、もう一度、主の憐れみの中に生きます。傷がまだあるかもしれません。けれども、ちょうどリハビリの時に痛みが走るように、痛みはあります。けれども、それは良くなっていく過程であります。先の、ペテロの話に戻りますと、イエス様は復活されて、ペテロに会われて、三度、「わたしを愛しますか？」と言われ、そして「羊を飼いなさい」と命じられました(ヨハネ 21 章)。主は、心に責めがないようにペテロに来てくださったのです。

そして、心に責めがないのであれば、「**私たちは神の御前に確信を持つことができます**」とあります。確信というのは、後ろめたさがなく大胆であることを示しています。元々は、自分がしたことにとまらぬ恐れから自由にされていることを示しています。恐れれば、福音を語るができない、福音を恥としてしまいますが、自由であれば、どんなに反対者がいようと良心のゆえに語るができます。これが確信の意味です。第一の手紙では、主が来臨される時にそうであるとヨハネは語っていました。「2:28 さあ、子どもたち、キリストのうちにとどまりなさい。そうすれば、キリストが現れるとき、私たちは確信を持つことができ、来臨のときに御前で恥じることはありません。」

これが目標です。神の御前に確信を持つことができるような関係を築くこと、そうした関係になるように成長することが目標です。ピリピ書 1 章において、パウロが彼らのためにこう祈っています。「ピリ 1:9-11 私はこう祈っています。あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、10 あなたがたが、大切なことを見分けることができますように。こうしてあなたがたが、キリストの日に備えて、純真で非難されるところのない者となり、11 イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神の栄光と誉れが現されますように。」そしてパウロは、ローマ総督の前で、「使徒 24:16 私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、最善を尽くしています。」と言いました。

この確信があるので、次の節の、祈り豊かな生活も可能になるのです。心に責められるところがないので、だから、神に自由に願うことができるし、神も何でも与えることができます。